

# 附属幼稚園の教育(2) 五月

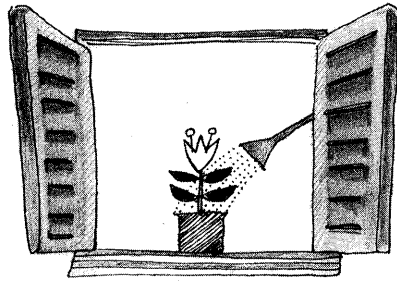
村石 京

五月の保育とねらい

附属幼稚園では、保育室も園庭も、五月のさわやかな空のように子どもも教師もともに心も身体ものびやかで自由でありたいとのぞんでいます。日々の保育の中では、子どもたちに種々な要求を出して子どもたちを制約することなく、子どもたちの生活の中に明るいびのびした空気の満ち満

ちた生活を送りたいと願っています。

新入園児たちも少しずつ園の生活になれてきて、自分を出せるようになって、表情にかたさがとれて明るくなごんできたりにしています。遊びも四月の入園当初のそつと遊具に触れて遊ぶといった様子から一歩進んで、遊具を媒介にして淡いながらも友だちとのつながりも徐々に覚えてく



る時期です。

勿論まだ園の生活になじめないでいる子どもや、母親と離れにくい子どもも数人見られたりします。これは子どもが皆一律でないと思えば、当然のこととして受けとめることが出来るでしょう。無理に母子分離を急いだりしないで、子どもが保育者の方に自然と気持ち向けてくれるようになるまで、努力しながらもあせらずに見守っていきたいと考えています。子どもたちの様子を見ながら保育時間を少しずつ延ばしていったり、この月から三歳児は週一回程度のおべんとうの日を設けたり、四歳児は週二回、五歳児は週三回おべんとうをと、年齢によっての保育時間を考え、子どもの体力と合わせながら無理なく園生活のリズムが身につくようにと配慮しています。

新入の大部分の子どもたちはこの一か月の間に、いろいろなことに興味を示し、随分活気が出て来ました。元気がありすぎてはめをはずしてし

まう子どもや、帰りの時間になっても帰らないと行ってがんばる子どももいたりもします。子どものこうした行動があると、担任としては早くぬけ出したいと悩むことも多いのですが、困ったことと頭をかかえるのではなく、こうした行動も一つには自分を出せるようになったことの現れですから、元気になっていろいろな面を見せてくれるようになったのだととらえるようにしたいと思えます。お母さんから離れにくくて泣いている子どもも、帰りたくないと言って駄々をこねている子どもも、やがて保育者との間に大きな信頼関係が育つ頃には、それは自然と解決出来ることなのですから。

また、この月位から保育者への子どもたちの要求がとて多くなってくるようです。はじめは自分のしてほしいこともなかなか言葉に出せずについて、保育者の側から察していかなくてはならなかったのに、今は自分のいろいろな要求を教師に

ぶつけてくるようになりました。「やって」「やって」と次々と言われて保育者は目のまわるような忙しさです。また、ある子どもと手をつなげば、もう一本の手をつなごうと他の二、三人が競い合って、こちらは思わず嬉しいひめいとなることさえあります。子どもたちが少しずつ教師の存在を意識するようになってきたからなのでしょう。保育者の存在を子どもたちが、自分の要求を満たしてくれる人という安心感をもって受けとめてくれたなら、とても嬉しいことだと思います。あるいは子どもたちは無意識の中に、保育者のことを自分の方に心に向けてくれる人だろうか、自分のことをわかってくれる人だろうかとはかっているのでしょうか。出来ることでも場合によっては甘えて、やってもらうことによって、保育者とかかわりを求めていることもあると思います。この頃の「やって」に対しては早く自立出来るようにとうながすのではなくて、安心して子どもが

飛び込める存在となるように、暖かい大きな心で受けとめていくことが大切だと考えています。

私も、幼児期は早く一人前の人間として自立するための時期としてあるのではなくて、周囲の大きな愛情に包まれながら心豊かな人間として育ち、人に対する信頼を築いていく大切な時期であると考えています。そのため園生活の中においても、保育者は家族の中のお母さんと同じように子どもを全面的に受け入れ、子どもの気持ちを理解し、子どもの要求をかなえ、子どもからは大きな信頼を得たいと願っています。そうはいっても勿論幼稚園は集団生活の場ですから、全部が全部というわけにはいかないこともあります。人に迷惑をかけたなり、乱暴な行為がいけないことはわかってもらいたいと思いますし、止めなければならぬ場合もあるでしょう。子どもの勝手気ままを許すのと、子どもの思いを充分満たしてあげることの大切さとの違いを、保育者はよくわかって

いかなくてもはならないと思います。

そのためには一人ひとりの子どもをよく知るこ  
とが最も肝要となると思います。一人ひとりの子  
どもを大切に保育とはよく言われますが、そ  
の原点は一人ひとりの子どもをよく知ること、子  
どもの今のぞんではいることを理解し、その子ども  
の要求に応えていくことからはじめられると思  
います。それが子どもとの信頼関係のきずなをつ  
くる第一歩であり、子どもも自分のことをわかって  
くれる人、自分のことを認めてくれる人に対して  
心を開いていくのです。

保育者自身、自分はどういう級をつくりたいと  
か、こういう学級運営をしたいという考えは当然  
持っていると思いますが、保育者が級の中心的存在  
ではなくて、あくまでも子どもが中心なので  
す。保育者がある程度の存在感を持っているのは

やむを得ないとしても、心がまえとしては保育者  
は学級の中の一員として子どもとともにあるとい  
う気持ちを持ち、子どもを中心とした日々を送る  
ための基礎がための月となるように、子どもたち  
を支えていきたいと考えています。この時期の保  
育者の課題としては「子どもの要求に出来るだけ  
応えること」「子どもに誠実に対応していくこ  
と」などとなるでしょう。そして新入園児は「元  
気に登園し、楽しく過ごせるように」年長組の子  
どもたちはそれに加えて、「友だちと一緒にいろ  
いろな遊びを楽しむことが出来るように」などが  
ポイントとなるのではないのでしょうか。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)